第6章 「まゆかへ」

副読本 50 － 51 ページ

年　　組　　番　名前

1 今日の学習で思ったことや考えたことを書きましょう。

まゆかへ

まゆかは　とてもやさしかったね
小さい子のめんどうを見たり
遊んであげたりするのが好きだったよね
おばあさんと買い物に行ったときには
お菓子は必ず２個買って来て
「これはお兄ちゃんのね。」
って　ぼくに１つくれたよね
まゆかは　がんばりやさんで
負けずぎらいだったよね
幼ち園のころ　鼓笛隊のキーボード練習を
家で何回も何回もしていたね
１年生のときのマラソン大会は
１位をとったね
２年生のときは３位だったけれど
まゆかがにこにこでメダルをもらったとき
ぼくは　とてもうれしかったよ
学校の図書カードには
借りた本の名前がいっぱい書いてあって
こんなに読んでいたんだと思って
びっくりしたよ

ぼくとまゆかはいつもいっしょだったね
遊んでいて
まゆかがふざけて投げたペットボトルが
ぼくのおでこに当ってしまったことがあった
よね
ぼくのおでこの血を見て
まゆかが目にいっぱい涙をためて
「だいじょうぶ。」
って　心配してくれたね
「だいじょうぶだよ。」
って言っても
何回も
「ごめんね。」
って　言っていたね
いつまでもいつまでも
ぼくのそばをはなれなかったね
今でも　おでこに傷が残っているよ
ぼくのおでこの傷を
まゆかがちっちゃい手でさわって
ふざけることも
けんかをすることも
もうできないんだね
とてもさびしいよ

まゆかはいつも
「兄ちゃん，兄ちゃん。」
と　ぼくをよんでいたよね
まゆかの
「兄ちゃん」と呼ぶ声を
もう一度聞きたいよ

７月９日は　まゆかの誕生日だから
みんなで誕生会をしたんだ
まゆかの好きなチョコレートケーキだよ
まゆかもケーキ食べてくれたかな
まゆかは　ぼくの夢の中に出て来てくれたね
「兄ちゃん　前のことは考えないで
明日のことを考えたほうがいいよ。」
って
何だかむずかしいことを言っていたよね
はっきりと覚えているんだ
これからも
夢の中でもいいから遊びに来てね
いつでもいいから遊びに来てね
ぼくはいつまでも
まゆかの兄ちゃんだからね

ぼくは野球をやっているから応援してね
まゆかのやりたかったこと
まゆかの分もがんばっていくからね
空から見ててね

ありがとう
まゆか
ありがとう

（作文宮城 60 号　特別編「あの日の子どもたち」より）